



Title	山路愛山と『護教』 - 愛山主筆時代の『護教』論説目録 -
Author(s)	岡, 利郎
Citation	北大法学論集, 36(1-2), 563-574
Issue Date	1985-09-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16489
Type	bulletin (article)
File Information	36(1-2)_p563-574.pdf



[Instructions for use](#)

山路愛山と『護教』

— 愛山主筆時代の『護教』論説目録 —

岡 利 郎

はじめに

明治中期から大正初期にかけて活躍したジャーナリスト・史論家・評論家、愛山山路彌吉（一八六五—一九一七）についての研究は、近年ようやく本格的なものになってきたといえよう⁽¹⁾。しかしながら、愛山が中央の文壇に雄飛するきっかけとなった、メソジスト三派の連合機関紙『護教』については、従来散逸してみられないというのが定説ようになっていた。しかるに最近愛山主筆時代の『護教』の一部の所在が判明した。これにより今後の愛山研究に資する所はきわめて大きいといえよう。現在わかっている限りでの愛山主筆時代（明24～30）の『護教』の所在を示すと左の通りになる。

第一号（明24・7・7）青山学院資料センター。

第一六号～一二四号（明24・10・24～明26・11・18）関西学院大

学附属図書館（但し後述の通り若干の欠号等あり）。

第二八五号（明30・1・9）以降 青山学院資料センター

右の『護教』中の主要な論文若干は前引の『民友社思想文学叢書』中の「山路愛山集」(一)(二)に収録されており、他の主要な論文も同書の「年譜」中に題名だけはのせておいたが、いずれも限られた紙面の中で十分とはいえないがたいものであった。そこで本稿では、愛山主筆時代の『護教』紙上の愛山の文章についてできる限り網羅的な目録を作ることをめざした。とはいえ筆者が直接原本を確認しえた前記の部分だけを対象としたものであることはいうまでもない。なお

特記しない限り、無署名の文であるが、そのうち明白に愛山の文でないとは断定できるものは除いたが、多少疑いのあるものは収録することにした。また「」内は各々の文章の欄名及び筆者（岡）による補足である。

第一号（明24・7・7）

「護教の希望する処」〔社説〕

「金森通倫君の日本現今の基督教及将来の基督教」〔批評〕

「第二号〜一五号 未発見」

第一六号（明24・10・24）

「新聞紙の調子」〔德育問題〕〔社説〕

第一七号（明24・10・31）

「何故に大政治家は大宗教育家たらざるべからざる乎」〔社説〕

「天長節を祝ひ奉るとして」山路彌吉〔天長節〕

「読書漫筆の一」愛山生〔雑記〕

第一八号（明24・11・7）

*「国家の基礎」（築地三原橋教会に於て）山路彌吉氏〔講壇〕

「救恤を急にせよ」震災に就て」青年に議すべきもの四あり

〔社説〕

第一九号（明24・11・14）

「眼を实地に着くべし」〔社説〕

「読書漫筆の二」愛山生〔雑記〕

第二〇号（明24・11・21）

「統政教新論 第一編総論」地方新聞の無礼なる記事」〔社説〕

「野の花 麻布教会に於て」山路彌吉氏〔講壇〕

第二一号（明24・11・28）

「統政教新論 第二編 予備の時代（第一）」基督教徒の家庭」

「国会の爲めに祈るべし」〔社説〕

第二二号（明24・12・5）

「説難（震地伝道に就て）」〔社説〕

第二三号（明24・12・12）

「統政教新論 第二編予備の時代（二）」〔社説〕

「小言」山路生〔小言〕

第二四号（明24・12・19）

「統政教新論 第二編予備の時代（三）」再び五ヶ月間の大演説会に就て」〔今日の問題〕〔社説〕

第二五号（明24・12・26）

「降誕節」年を送る」統政教新論第二編予備の時代（四）」〔社説〕

「降誕節」年を送る」統政教新論第二編予備の時代（四）」〔社説〕

第二六号（明25・1・3）

「年を迎ふ」〔社説〕

第二七号 (明25・1・9)

「家と教会」 「壮士」 「成功」 「社説」

「統政教新論 第二篇予備の時代(甲)」 「社説」

第二八号 (明25・1・16)

「起て『ホーム』論を叫ぶべし」 「統政教新論 第二篇予備の時

代(其六)」 「社説」

第二九号 (明25・1・23)

「櫃を買ふて珠を還すこと勿れ」 「三たび五ヶ月間有志大演説会

に就て」 「社説」

「荒村夜婦」 愛山生 「新体詩」

第三〇号 (明25・1・30)

「統政教新論 第二章予備の時代(其七)」 「社説」

「孟子を読むと題する論文を読む (国民之友第四百十三号)」 機

溪生⁽²⁾ 「寄書」

第三一号 (明25・2・6)

「英雄不^レ起奈^二神州^一」 「社説」

第三二号 (明25・2・13)

「いのち 第一号」 山路彌吉 「批評」

第三三号 (明25・2・20)

「一脚を欠くの人、宗教を欠くの国」 「又しても」 教育世界の—

問題」 「社説」

「青山評論 第一号」 愛山生 「批評」

「統政教新論 第二章(八)」 山路彌吉 「論説」

第三四号 (明25・2・27)

「統政教新論 第二章(九) 小経綸の時代」 山路彌吉 「論説」

「雑感」 愛山生

第三五号 (明25・3・5)

「故郷の友人に与へて俗礼(婚、葬、祭)を論ずる書」 「社説」

「統政教新論 第二章(其十) 仏儒総評」 山路彌吉 「論説」

第三六号 (明25・3・12)

「忠君論」 「社説」

第三七号 (明25・3・19)

「^{*}信仰個條なかるべからず」 「ミッション・スクール(宣教師学校)

に対する世間の不平」 「思想の自由について(神道家に告ぐ)」

「大祈祷会」 「社説」

「統政教新論 第三章改革の時代 第一節狼狽の原因(上)」 山

路彌吉 「論説」

第三八号 (明25・3・26)

「教会は宜しく其正当の位置を保守すべし」 「社説」

「統政教新論 第三章改革の時代 第二節狼狽の原因(中)」 山

路彌吉〔論說〕

第三九号 (明25・4・2)

〔史海(第九・十号)「愛山生」〕〔評論之評論〕

第四〇号 (明25・4・9)

〔伝道は職業に非ず(再び)〕〔社説〕

第四一号 (明25・4・16)

第四二号 (明25・4・23)

第四三号 (明25・4・30)

〔以上三号には愛山の文章みあたらず〕

第四四号 (明25・5・7)

〔信仰復興に付きて〕〔社説〕

〔伝道と婦人〕愛山生〔論說〕

第四五号 (明25・5・14)

〔家中の聖書〕〔社説〕

第四六号 (明25・5・21)

〔如何にせば教会は振起すべき〕〔法学士の無識〕〔社説〕

第四七号 (明25・5・28)

〔謹んで皇后陛下の御誕辰を祝し奉る〕〔弁妄第一 法学士は偽善を教へんとする乎〕〔社説〕

〔智慧と知識の蓄積は一切キリストに蔵れてある也(哥羅西書二)〕

ノ三) 山路彌吉〔講壇〕

第四八号 (明25・6・4)

〔弁妄第二 宗教的の個人主義〕〔夏期学校に同情を表すべし〕

〔社説〕

第四九号 (明25・6・11)

〔教会は自ら世間に対するの義務を弁知るべし〕〔社説〕

〔消夏漫筆〕愛山生〔雜記〕

第五〇号 (明25・6・18)

〔婚姻論(夫婦相擇ぶの必要を論ず)〕〔社説〕

第五一・五二号 未発見

第五三号 (明25・7・9)

〔故郷及故人〕〔社説〕

第五四号 (明25・7・16)

〔消夏漫筆二〕愛山生〔雜記〕

第五五号 (明25・7・23)

〔信仰復興を疑ふ勿れ〕〔社説〕

〔神の撰び〕山路彌吉〔論說〕

第五六号 (明25・7・30)

〔説教者としてのイエス・キリスト〕〔社説〕

〔余が進退に就て〕山路彌吉〔教報〕⁽³⁾

第五七号 〔未発見〕

第五八号 (明25・8・13)

「進んで身を伝道界に投ずべし(有為の青年に告ぐ)」〔社説〕

第五九号 (明25・8・20)

「行者を論ず」〔社説〕

第六〇号 (明25・8・27)

「本号愛山の文章なし」

第六一号 (明25・9・3)

「教会の事業は雑駁なり」〔社説〕

第六二号 (明25・9・10)

「良心自由の爲めに戦ふべし」〔社説〕

*「文学と歴史(廿五年八月廿七日麻布青年会に於て)」 山路彌吉

〔論説〕

第六三号 (明25・9・17)

「公簡一則(教育と宗教を論ず) 護教記者」〔社説〕

第六四号 (明25・9・24)

「愛山の文章なし」

第六五号 (明25・10・1)

「信條と風紀」〔社説〕

第六六号 (明25・10・8)

〔閑居論(明治廿五年十月六日下谷教会青年会に於て)〕 山路彌吉 〔論説〕

第六七号 (明25・10・15)

「田舎の伝道師」〔本社の希望〕〔社説〕

第六八号 (明25・10・22)

「祈禱論Ⅱハガルの実例」〔社説〕「左の一篇は社員山路彌吉氏が銀座会館に於て青年会の爲に爲したる演説なり、社説に換ふ」との前書きあり」。

第六九号 (明25・10・29)

「緊急問題(国家に対する教会の代表者)」〔社説〕

第七〇号 (明25・11・5)

「天長節を祝し奉る」〔社説〕

第七一号 (明25・11・12)

「教会内の風紀は如何」山路彌吉 〔社説〕

〔第七二・七三号 未発見〕

第七四号 (明25・12・3)

「愛山の文章なし」

第七五号 (明25・12・10)

「ウエスト廉眠る」〔降誕節近けり〕〔社説〕

第七六号 (明25・12・17)

「東京基督信徒の大倶楽部」「新『パリサイ』人」「宣教師学校の近況如何」「英語と基督教」「機関新聞たるを忘るること勿れ」「講壇の道徳」〔社説〕

第七七号(明25・12・24)

「静岡教会火く」〔社説〕

第七八号(明25・12・31)

「明治廿五年を祖す」〔社説〕「婚姻」欄に「十二月廿七日麻布メソジスト教会に於て武田芳三郎氏と戸板せき子と、山路彌吉氏と田島たね子」とあり。

「自然の声」機溪生〔特別寄書〕

第七九号(明26・1・7)

「新年、新事業、新人物」「婦人矯風会何ぞ振はざる」「新年劈頭の問題」「海軍軍人親睦会」「高知伝道」「北海の孤児院」「内村鑑三氏」「両博士」「梅花女学校(大阪)」「煙管製の梵鐘」「大日本仏教軍」「美しき家庭」愛山生〔社説〕

第八〇号(明26・1・14)

「何ぞ伝道師の婦とならざる(愛山生)」〔社説〕

第八一号(明26・1・21)

「神学研究会」「新年の東京(物質的觀察)」「国民之友の無名氏と重野安禪氏」「山本覚馬氏」「通信せらるる諸君に乞ふ」「小廉

曲謹の時代」「出獄人保護会」「各地の禁酒会」「不敬事件」〔社説〕第八二号(明26・1・28)

「教会は光明の中に眠る」「有為の青年」「基督の信徒」「徹底的信徒」「何の兆ぞ」「五大本山住職の上京」「良心は活く」「神戸の伝道」「嗚乎真宗」「鈔澤仏教要義全書」〔社説〕

第八三号(明26・2・4)

「田舎牧師」「天賦人權(吾人の題目)」「教会の苦情」「本願寺の節儉」〔社説〕

第八四号(明26・2・11)

「アレキサンダー、ジェーン、ブーチャー衰翁を救ひし事(愛山生)」〔家庭及少年〕

第八五号(明26・2・18)

「家庭に於ける基督教」「信する所は唯一也」「高知教会を焼かんとせり」〔社説〕

第八六号(明26・2・25)

*「教育論序論」山路生〔社説〕〔此稿未完と末尾に記されているが統稿はない〕

第八七号(明26・3・4)

「日本宗教史 総論」機溪生〔論叢〕

第八八号(明26・3・11)

- 「日本宗教史 親鸞上人を論ず」機溪生〔論叢〕
第八九号(明26・3・18)
「親鸞上人を論ず(承前)」機溪生〔論叢〕
「形式を軽んずること勿れ」〔社説〕「文体、内容等から考えて愛山ではない可能性もあるが念の為収録しておく」。
第九〇号(明26・3・25)
「平等論(明治廿六年三月一八日築地教会青年会に於て)」山路生〔論叢〕
「日蓮を論ず」機溪生〔史談〕
「井上哲二郎氏に対する駁論の略(一)」〔社説〕
第九一号(明26・4・1)
「伝道界の急務」〔社説〕
第九二号(明26・4・8)
「日蓮を論ず」機溪生〔史談〕
「伝道は観察より始る」〔社説〕
第九三号(明26・4・15)
「本郷教会に於ける組合教会の大演説会」山路生〔通信〕
「井上哲二郎氏に与ふ」山路彌吉〔社説〕
第九四号〔未発見〕
第九五号(明26・4・29)
「経験(真個の『メソヂスム』)」
「地方的団結」
「島原天草の伝道」
「九州福音同盟会の決議」
「何ぞ難解の文を作る」
「福音同盟会(行け)」
「教会と教師に檄す」〔社説〕
第九六号(明26・5・6)
「教会内の高踏派」
「経験及信條」〔社説〕
第九七号(明26・5・13)
「黙示」
「經典論」
「文字魔(時事に感あり)」
「軽く語る勿れ(同)」〔社説〕
第九八号(明26・5・20)
「岩本善治君に与ふ」山路彌吉〔評論之評論〕
「教会と教師に檄す(再び)」〔社説〕
第九九号(明26・5・27)
「靈の生命」
「年会近づけり」
「無名氏」〔社説〕
第一〇〇号(明26・6・3)
「第百号」〔社説〕
第一〇一号(明26・6・10)
「真理と聖書」〔社説〕
第一〇二号(明26・6・17)
「事務的會議たらざらしめよ(年会に望む)」
「大演説会を開くべし(同上)」
「博士カックラン氏を送る」
「破」〔社説〕

第一〇三号(明26・6・24)

「神と人」〔社説〕

第一〇四号(明26・7・1)

「インスピレーション(ミッショナリー)宣教師学校の卒業生諸氏を送る」〔社説〕

第一〇五号〔未発見〕

第一〇六号(明26・7・15)

〔愛山の文章なし〕

第一〇七号(明26・7・22)

「読者諸君に告ぐ」山路生〔通信〕「八月より、小沢孫太郎・鶴

崎庚午郎・三浦泰一郎・水上梅彦の四名が編集に加わることを告

げたもの

「ない袖」機溪生〔雜記〕

「教会論」〔社説〕

第一〇八号〔未発見〕

第一〇九号(明26・8・5)

「大西祝氏の和歌」「文学界問題」〔以上二件愛山生とあり〕〔評

論の評論〕

第一一〇号(明26・8・12)

「成功乎、不成功乎」基督教の運動」「抽象的の議論必しも非な

らざ」〔社説〕

第一一一号(明26・8・19)

「宗派必しも非ならず」「信條なきは」「イエスの寛容」〔社説〕

第一一二号(明26・8・26)

「基督教新聞に就て」『ミッション・スクール』の活路」〔社説〕

第一一三号(明26・9・2)

「天下豈天よりも強き者あらんや 青山教会に於て」山路彌吉

〔講壇〕

「日本の花嫁」「女伝道者」〔起て働け〕〔社説〕

第一一四号(明26・9・9)

「教会の経済に於ける一意見(基本金)」「教会は光明の中に眠る

(再び)」「地震に於ては熱し洪水に於ては冷かなるべき乎」〔社説〕

第一一五号(明26・9・16)

「日曜学校教授会(江湖の意見を聞きたし)」「日本の花嫁」を

読む」「基督教新聞記者足下」「宗教界の「ユートピア」」〔社説〕

第一一六号(明26・9・23)

「如何にせば教会は成功すべきや」「讚美歌と家庭」「回顧する勿

れ(老人に告ぐ)」「偽善と真実」「静岡メソヂスト教会会員足下」

〔社説〕

第一一七号(明26・9・30)

「余が基督教を信ずる所以(一)」「愛山生」〔論遊〕

「教会音楽論」「律法と恩寵」「未来の觀念」〔社説〕

第一一八号(明26・10・7)

*「余が基督教を信ずる所以(一)(二)」愛山生〔論叢〕

「家拝を守るべし」「犠牲献身」〔社説〕

第一一九号(明26・10・14)

「基督教会の慈善事業に就て」「先輩と後輩」「伝道師の書牘に就て」〔社説〕

第一二〇号(明26・10・21)

「兄弟」「左の一篇は記者が麻布教会に於て演説せし草稿也」との前置きあり〕〔社説〕

第一二二号(明26・10・28)

「休徴は脚下にあり」「狭隘ならざれ(花嫁事件)」〔社説〕

「評論之評論(十月廿三日脱稿) 愛山生」

第一二二号(明26・11・4)

「天長節」「自重せよ(伝道師諸氏)」「救恤の二法」〔社説〕

「評論之評論 愛山生」

〔なお本号は第一頁より四頁まで欠〕

第一二三号(明26・11・11)

「教会論」〔社説〕

第一二四号(明26・11・18)

〔本号第三頁より六頁まで欠。愛山の文章なし。なお前号及び本号に『護教』新に生れたり〕との広告がのっている〕

第一二五号(二八四号 未発見)

第二八五号(明30・1・9)

「日本の基督教」〔社説〕

第二八六号(明30・1・16)

「伝道者の学問」「政治は即ち教育なり」〔社説〕

第二八七号(明30・1・23)

「国民の要求する者は何物ぞ」〔社説〕

第二八八号(明30・1・30)

「客と神学を談ず(上)」「社説」「(下)は未発見」

第二八九号(二九三号 〔愛山の文章なし〕)

第二九四号(明30・3・13)

「自業自得(根本的改革)」「山口県師範学校校長足下」〔社説〕

第二九五号(明30・3・20)

「第十九世紀の思想の傾向」〔社説〕

第二九六号(明30・3・27)

「進軍喇叭」「再び山口県師範学校校長に与ふ」〔社説。末尾に(明治三十年三月廿一日夜 山路彌吉記)とあり〕

第二九七号(明30・4・3)

「最近三十年間日本の思潮を論ず(上) (中央会堂演説草稿)」護
教記者 (社説)

第二九八号 (明30・4・10)

「最近三十年間日本の思潮を論ず(下) (中央会堂演説草稿)」護
教記者 (社説)

第二九九号 (愛山の文章なし)

第三〇〇号 (明30・4・24)

「青年なる日本」と英国の清教徒 北陸漫遊中 山路彌吉 「信
教自由に関して 北陸漫遊中 山路生」教授ヘンリー・ドラモン
下」(社説)

第三〇一号 (明30・5・1)

「青年の日本と英国の清教徒(続) 北陸漫遊中 山路彌吉」(社
説)

第三〇二号 (明30・5・8)

「社会問題研究に就て」(社説)

「日本メソヂスト教会内国伝道会社東海道北陸道遊歴の記」山路
彌吉 (通信)「この文は第三〇三号(5・15)三〇四号(5・22)三
〇六号(6・5)三〇七号(6・12)にかけて連載」。

第三〇三号 (明30・5・15)

「書籍及新聞 最上の尊敬は正直の批評なり」山路生 (民友社

刊徳富健次郎氏著「トルストイ」他の書評」。

第三〇八号 (明30・6・19)

「訣別の辞」山路生 (社説)「末尾に「明治三十年六月十六日澁
谷村に於て記す 山路彌吉」とあり」。

おわりに

以上が現在までに判明している限りの愛山主筆時代の『護教』で
ある。このあと第三一〇号(明30・7・3)の「社説」欄に、別所
梅之助の「入社之辞」が発表され、別所主筆の時代が始まる。ただ
し第三一五号(明30・8・7)までは「編輯人 山路彌吉」のまま
で、護教社の住所も渋谷村中渋谷九〇二番地、愛山宅のままである。
第三一六号(明30・8・14)にいたってはじめて、「編輯人 別所
梅之助」となり護教社も中渋谷三六八番地に移るのである。もっと
もその後も愛山と『護教』とが全く無関係になったわけではなく、
若干の論文や翻訳を發表したり、愛山の動静を伝えたりもしてい
る。さらに愛山の死に際しては別所梅之助、徳富蘇峰、宮地生等の
追悼文をのせている。そして右の目録に収めた愛山の文章を通読し
てみると、従来あまり知られていなかった「キリスト者」としての
愛山の姿が、より明瞭な形で浮び上ってくるのである。なお特記す
べきは愛山と透谷との有名な「人生相渉論争」に関連した文章が、

この『護教』紙上にもかなりある点である。これまで知られていなかった北村透谷の文章が本紙上でみつかったことは、先に川崎司氏によって紹介されているが(『図書』一九八四年二(号)⁽⁵⁾)、他にも愛山と透谷を結びつける上で重要な役割を果たした明石桜井成明の文章もあり、今後「人生相渉論争」の研究を進展させる為にも本紙発見のもつ意味は大きいであろう。最後に『護教』主筆時代の愛山について論じた植村正久の一文は、なかなか傾聴に値すると思われるので、左に引用しておく。

「その思想は敏活なり。その筆は軽快にして鋭利なり。その趣味は多角形なり。猛烈なるその感情、稜々たる主角、当り難き窮氣、抑うべからざるその文学的功名心、皆愛山生の文章をして一種の光彩と気魄とを具えしめたり。山路氏の『護教』における地位に付きて少しく遺憾に思われるは、氏がキリスト教の伝道と全く心身を一につにせず、その職掌より已むを得ず書くと言うごとき有様にてありしことなり。教会はかくのごとく樹立せざるべからず、神学はかくのごとく組織せざるべからず、キリスト教はかくの如く宣伝せられざるべからずと、根底ある主張を抱懐し、勢力と才学とをこの理想に捧献して、尽くすところあらんと期するにあらずんば、『護教』のごとき雑誌を適当に運転すること能わざるべし。山路氏の『護教』における地位は、少なくともアブノール

マルなりしと言わざるべからず。しかれどもその記者たりし間、『護教』が元氣よく、筆鋒快利にして、読者に一種の面白味を与えしことあるは、さすがに山路氏の力を顕はせるものと言つて可なり。⁽⁶⁾

* * *

おわりにのぞんで、『護教』の発見について御教示頂いた川崎司氏、『護教』原本の閲覧及びコピーに際し多大の便宜をはかって頂いた、青山学院資料センター、関西学院大学附属図書館、北海道大学附属図書館の関係各位に心からの謝意を表したい。そして私が北大に在職した十五年間、常にあたたかい眼で私を見守っていて下さった故富田容甫教授の霊に、このつたない一文をささげることが許して頂きたいと思う。

(1) これについてくわしくは拙稿「山路愛山研究序説」『惑溺』と『凝固』その(一)、『北大法学論集』第二五巻第四号(昭50)、及び筆者の編による『民友社思想文学叢書』中の「山路愛山集」(一)(三)一書房刊、昭58・60)、西田毅・和田守・岡利郎編「民友社思想の研究」(三)一書房、近刊)等参照。

(2) 「機溪生」が愛山の筆名であることは前引「民友社思想文学叢書2 山路愛山集(一)」の「解題」四三五頁参照。なおこの論文の対象となっている「孟子を読む」というのは、塚越停春の論文である。

- (3) 「余は日本メソヂスト教会教師試補たることを辞したり、是れ余は教師となりて働かんよりも、寧ろ他の方法を以て働くこと最も適せりと信じたれば也……」と述べており、この文が発表された直後明治二五年八月、愛山は正式に国民新聞社、民友社の社員となった。ただし「本紙を管掌する権利者にして余を用ふる間は、余は好んで編輯の一員たる義務を尽さんのみ」と彼自身いつているように、『護教』主筆としての地位には変りなかつた。その後第一〇七号の文にあるように、明治二六年八月から小沢孫太郎他三名が新たに編集陣に加わっている。
- (4) 『護教』第一三三七号（大正六年三月二三日）第一三三八号（同三月三〇日）参照。
- (5) 透谷隠者「春を迎ふ」第三一号（明25・2・6）。
- (6) 植村正久「キリスト教徒の新聞雜誌及びその記者」『福音新報』第一六五号（明31・8・26）～一六八号（明31・9・16）。
- 『植村正久著作集』第三卷（新教出版社刊、昭41）一四八―九頁より引用。
- なお本文中＊印を付した論文は前引『民友社思想文学叢書』「山路愛山集」(一)(二)に収録されている。

Yamaji Aizan and "Gokyô"

Toshirô OKA*

This is a list of the articles by Yamaji Aizan (1865-1917) in "Gokyô" which was a weekly bulletin of Japanese Methodist Churches in Meiji periode. Aizan, who was a famous journalist and historian, was the chief editor of that bulletin from 1891 to 1897.

* Professor, Faculty of Law, Hokkaido University.